

「塔の小公子」たち

——シェイクスピアと絵画——

村上 健

パリのルーヴル美術館に、フランスのロマン派画家ボール・ドラローシュ（一七九七—一八五六）の描く『エドワードの子供たち』という一枚の油彩画がある。歴史画と肖像画を得意とし、サロン（官展）を中心に活躍した当代の人気画家ドラローシュがこの絵を制作したのは、ルイ・フィリップの七月王政が成立した一八三〇年のこと。ちなみに、同じ年には、彼より一歳年下のロマ

ン主義絵画の巨匠ドラクロワが、『民衆を導く自由の女神』を完成している。

画題に見える「エドワード」とは、英国ヨーク王朝の初代国王エドワード四世（在位、一四六一—七〇／七一—八三）。英国の王位継承権をめぐる、赤バラのランカスター派と白バラのヨーク派に国論を二分し、骨肉相争う血なまぐさい戦闘が続けられたバラ戦争（一四五—八五）のさなか、ランカスター家の国王ヘンリー六世を破って王冠を手に入れた人物である。内乱に揺れ続ける国政に憂いを残したまま、彼が一四八三年にこの世を去ると、後には三人の子供たちが残された。長女エリザベスは十八歳、十三歳にして王位を継承することになった長男のエドワード、そして、その弟ヨーク公爵のリチャード（十一歳）である。やがてエリザベスは、権謀術数の渦巻く世にあつて、一四八六年、ランカスター家の血を引く、バラ戦争最後の勝利者ヘンリー・テューダー（戴冠してヘンリー七世）と結婚し、英国ルネサンスの花開くテューダー王朝の初代国王の妃となるのだが、二人の幼い



弟たちは、父エドワード四世の死後、虎視眈々と王位をねらっていた、先王の弟で彼らの叔父にあたるグロスター公リチャードの野心の犠牲となり、ロンドン塔の一室で暗殺者に絞め殺されるという悲劇的運命をたどる。

ドラローシュの筆が描き出したのは、薄暗い室内に置かれたベッドの上で互いに身を寄せる二人の王子のもとに刺客の手が迫る一瞬だろうか。憂いに沈んだ様子で小首をかしげ、兄に体をもたせかけるリチャードに対して、兄エドワードは、何かの物音にハッと気づいたかのように、画面左手に鋭い視線を投げかけている。二人の足元にいた小犬も、侵入者の気配を察してか、廊下の明かりがかすかに洩れるドアに向かって身構える――。

不気味な緊迫をたたえたこの絵画の背景となる史実を題材とした文学作品といえば、ウィリアム・シェイクスピア（一五六四―一六一六）の初期の歴史劇『リチャード三世』を思い起こす人も多いだろう。あらゆる策謀を用いて王位を篡奪したグロスター公リチャード（リチャード三世）が、ボズワースの戦い（一四八五年）でへ

ンリー・テューダーに敗れるまでを描いたこの戯曲に、次のような場面がある。四幕三場の冒頭、リチャードの命を受けて二人の王子を暗殺した騎士ティレルは、舞台に登場するや、その時の様子をこう観客に独白する。

残虐非道な仕事もこれでやっとかたがついた。

これほど無惨な人殺しは、イングランドの歴史のどのページをくつても例があるまい。おれがこの

残忍きわまりない血みどろ仕事に引きずりこんだ

ダイトンとフォレストの二人は、名うての悪党、

血に飢えた犬でありながら、さすがに人間としての

あわれみ心に胸が熱くなったらしい、王子たちの死に際しては物語のなかの子供のように泣いていた。

「こうやって」とダイトンは言った、「二人は寝ていた」

「こうやって」とフォレストは言った、「おたがいにアラバスターのように白い腕をからみあわせていた、

二人の唇は一本の茎に咲く四つの赤いバラの花だ、それが初夏の光に美しく咲き誇り口づけしあっていた。

枕もとに一冊の祈禱書があった、それを見て」

とフォレストは言い続けた、「決心がぐらついた、

ところが、畜生」——と言ってあの悪党め口をつぐんだ、

するとダイトンが引きとった、「おれたちは、自然が

ものを造りはじめたとき以来の最高の傑作、

もっとも美しい作品を絞め殺してしまったのだ」

そこまで言う、二人とも良心と悔恨にさいなまれ、

口もきけなくなった。おれはそのままそこへ二人を

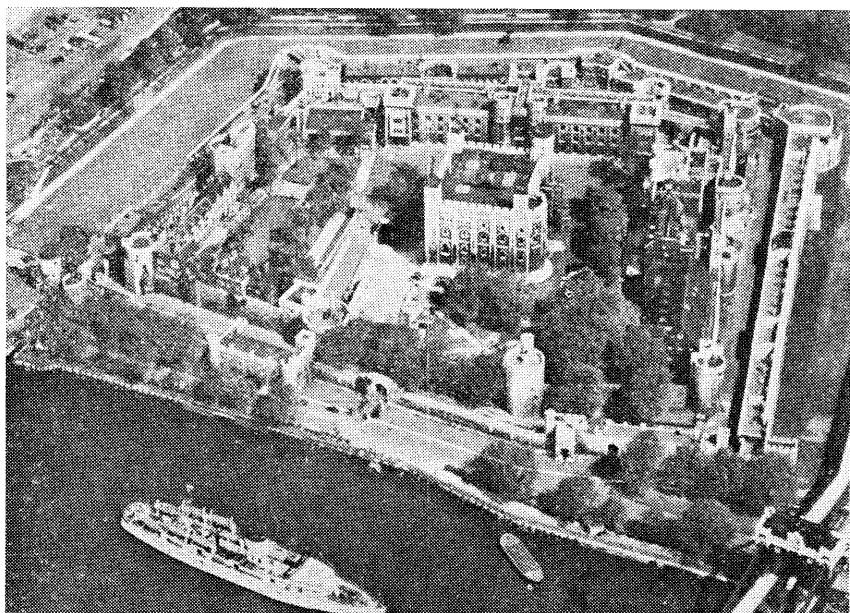
おいてきた、残忍な王のところへ知らせに行くために。

(小田島雄志訳)

この箇所は、『リチャード三世』の中でも、短いながら印象的な場面だが、台詞を語るティレルという人物は、作品全体を通して二度登場するだけのほんの端役にすぎ

ない。しかし、その端役にして、ひとたび舞台に現れるや、これほどの台詞を喋ることが許されるのが、シェイクスピア劇の大きな魅力の一つだと言えよう。もう一度、前の台詞を読み返していただきたい。ティレルは、王子殺害の模様を直截的に説明したりせず、仲間の悪党の行動を語り、彼らの言葉を再現することによって、人間心理を通して、見た事件の意味を、我々に吐露している。「名うての悪党」でさえ心底に抱く、憐れみの情と良心の呵責。それにもかかわらず王子を絞殺してしまう、人間の残虐さや金銭欲・昇進欲の浅ましさ。そして、二度と取返しのかぬ罪の重大さを悟るのは、いつでも、その罪を犯してしまっただけのこと……。自らも加担した王子殺しを「残虐非道な仕事」と呼び、その命令を下したリチャードを「残忍な王」と形容することで閉じられるこの台詞は、単なるティレル個人の告白ではなく、観客の心情を代弁する役割さえ果たしている。

この台詞を読んで、「『ドラローシュの描く二人の王子は、眠っていなかったではないか』などと言うのは、も



ちろん野暮というもの。シェイクスピアにせよ、ドラロ
ーシュにせよ、過去の歴史に想像力の翼をはばたかせ、
人間の真実に出来る限り迫ろうとしたにすぎない。

エドワード四世の二人の息子が、そのはかない命を散
らせたのは、旧ロンドン市街の東外れにあるロンドン塔
のブラディ・タワー（血塔）である。ルネサンスの寵
児サー・ウォルター・ローリーが幽閉された場所でもあ
るこの塔は、建造当初、ガーデン・タワー（庭塔）と名
付けられていたが、何時の頃からか、「血塔」という呼
称で知られるようになった。一説によれば、この二人の
王子が此処で暗殺された為というが、真偽のほどは定か
でない。また、エドワードとリチャードの二人も、以後、
「塔の小公子たち」と呼ばれることになる――。

〔付記〕 一九〇〇（明治三十三）年、官命を受けて英
国に留学した夏目漱石は、ロンドン到着の三日後（十
月三十一日）にロンドン塔を訪れ、帰朝してから、
『帝国文学』に「倫敦塔」なる散文を発表した。シェイ

クスピアやドラローシュに触発されて漱石が描き出し
た部分を此処に重ね合わせれば、読者の興味は一層か
きたてられることになるだろう。

（津田塾大学）